

国立能楽堂

特別企画公演

3月3日(金)午後1時開演・午後6時開演

3月4日(土)午後1時開演
国立能楽堂委嘱作品・初演

新作能

夢浮橋

ゆめの

作瀬戸内寂聴

演出梅若六郎

演出山本東次郎

装束デザイン植田いつ子

ポスター・デザイン横尾忠則

地謡/山

会田清、水、寛二、之

後見/宇高通成

山中貴博、当行雄

笛/一増隆之
小鼓/大倉源次郎
大鼓/亀井広忠

阿闍梨/梅若六郎
匂宮/金剛永謹
浮舟/梅若晋矢

声明/天納久和

角小田切、山崎正直、隆陽道、穏修昇、之
柴田、会田、寛二、之
小野里、山本順二、之

目 次

配役一覧
エロティシズムと宗教／梅原 猛
新作能「夢浮橋」について／瀬戸内寂聴
「夢浮橋」の演出・主演に際して／梅若 六郎
新作能「夢浮橋」演出にあたって／山本東次郎
新作能「夢浮橋」によせて／植田いつ子
能のポスターを描いて／横尾 忠則
詞章／夢浮橋
主な出演者の紹介
新作能「夢浮橋」ができるまで
特集・浮舟／中井 和子
特集・源氏物語の香りと源氏香／山田 真裕
「夢浮橋」—作品の周辺
	26
	24
	20
	18
	14
	13
	12
	11
	10
	8
	6
	4

表紙デザイン＝横尾忠則

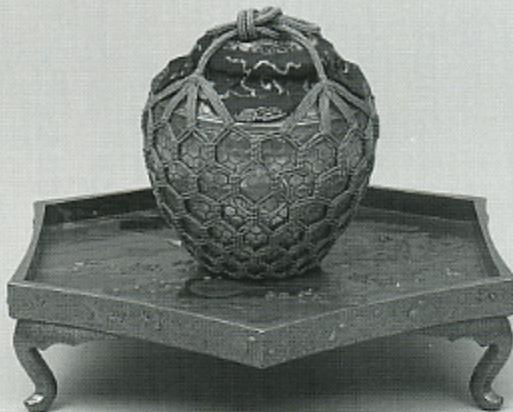
出演者等、都合により変更の場合がございます。
また、詞章は上演に際し多少の異同変更がある場合もございます。あらかじめご了承ください。

源氏物語の香りと源氏香

山田 真裕

香りは、日本の文化に不可欠な要素であると言えます。

仏教の伝来に伴って、香木をはじめとする何十品目にも及ぶ天然香料が日本にもたらされました。当時の人々にとって、異国の文化に触ることは、さぞかし新鮮な驚きであつたことと想像されます。



薫物の保存に用いられた「初音蒔絵薰物壺・台」

「源氏物語」に主題を取った蒔絵意匠の代表作「千代姫の婚礼調度」
のうち、「初音の調度」より 德川美術館蔵 重要文化財

飛鳥から奈良にかけての時代においては、香りは主に宗教的儀礼に欠くべからざるものとして、仏教の經典に則って用いられるに過ぎなかつたと考えられます。外来の文化を受容し、適応させる過渡期を経て、日本独特の文化として雅やかな香りの世界が開花するのは、平安時代まで待たねばなりませんでした。

花の色や香り、季節の移ろい、そして風の音や虫の声にも「もののあはれ」を覚えた日本人の感性は、異国からもたらされた香りに出会うことによつて更に研ぎ澄まされ、遂には「源氏物語」という世界的な古典を誕生させたのでした。

王朝の「雅び」を支えた美意識は、色ならば「製ねの色」、香りならば「薰物」に集約されます。「源氏物語」の最も重要な脇役である「薰り」は、薰物の香りであったと言えるのです。

薰物とは、香木を主体として数種類の香料を粉末にし、調合して蜂蜜等で練り固めた香のことで、部屋はもとより、衣服や髪・手紙にまで焚き染め、自己主張の手段として用いられました。

このような香りの用い方には、西洋の香水に通うものがありますが、特筆すべきは、当時の薰物は、すべて自家製であったということです。代表的な調合の例である「黒方・侍従・荷葉・梅花・菊花・落葉」の六種をはじめとして、何十種もの調合の記録が残されていますが、何れの場合も他人に作らせたものでは無く、宮人はおろか天皇さえも、自ら

原料を吟味し、製法にも工夫を凝らして、自分にふさわしい、あるいは自分らしさを感じさせる香りを想定し、作り上げたのです。

静寂と無臭とが支配する世界。夜は、星と月明かりの他は漆黒の間。かすかな衣擦れの音と共に、あたりの空気がわずかに揺れる気配、そしてふと薫る薫物の覚えのある香りに、訪れた相手が誰なのかを察する——そんな情景が想像されます。

『源氏物語』は、後世の文化に多大な影響を与え続けていますが、それ

は、世界に類の無い日本独特の嗅覚の芸術、「香道」においても例外ではありません。

香道とは、わずか数ミリ角、厚さ約〇・五ミリの香木のかからを炷くことにより、「何よりも、香りそのものを楽しむことを原点」志野流香道第二十世家元「峰谷宗玄宗匠」とし、「香味を知ることに始めて、それを悟るところに終わる(香道御家流第二十一代宗家故三條西堀山宗匠)」芸道です。

一片の香木の香りを聞くことに依って、宇宙の神秘に触れるかの如き境地に逍遙することこそが聞香の醍醐味ですが、そこに至る修練の過程の一つとして考案されたものに、「組香」と言う方式があります。簡略に

香木について

香木は、三種類に大別することができます。すなわち、白檀の仲間、沈水香木(沈香)の仲間、そして黄熟香の仲間です。

薫物や香道で主に用いられるのは沈香の仲間で、伽羅もこの中に含まれます。

香木の原本(沈香樹)は、ジンチョウゲ科アキラリア属のうち四種ほどが知られており、東南アジアの特定の地域に分布しています。高さ二〇メートルを超える常緑喬木ですが、健全に生育している沈香樹は、全くと言つて良いほど芳香を発しません。

虫が巣穴を作るなどして外傷を受けたところに特定の菌が寄生することにより、沈香樹はその部位に樹脂を分泌します。永い年月を経て樹脂が組織に沈着し、熟成されたものが沈香となるのです。

健全な部分は天寿を全うすれば枯れて朽ち果てますが、香木となつた部分は、熱を加えない限り変質することのない、永遠の生命を獲得するのです。

尚、正倉院の御物として著名な「蘭奢待」は黄熟香の仲間であり、沈香とは別種です。

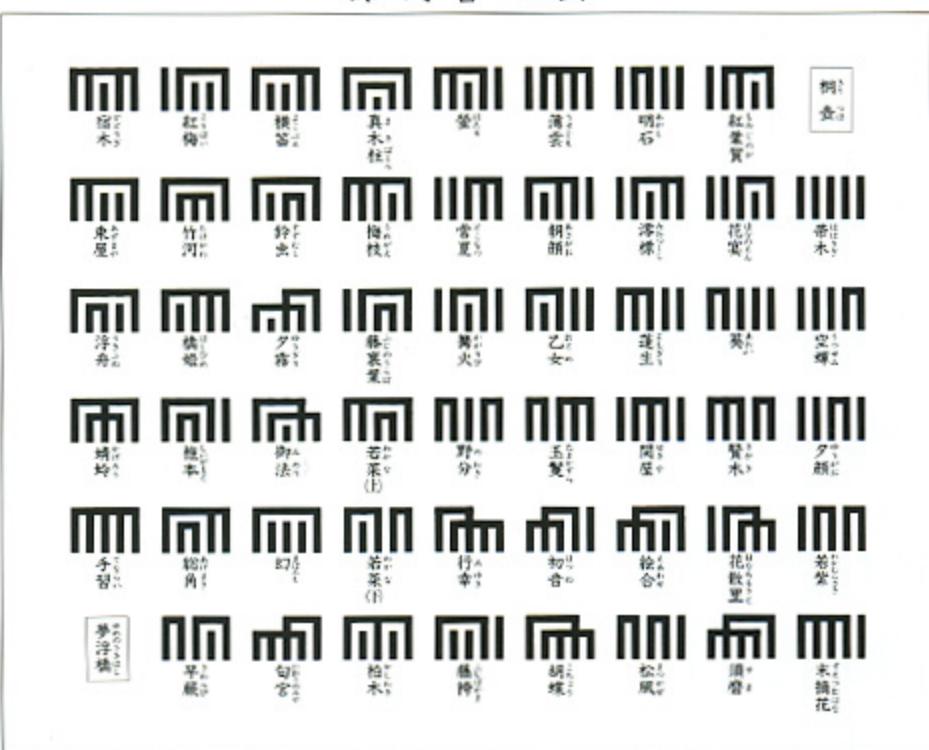


髪に薫物をたき染めるのに用いられた「初音蒔絵枕香炉」

「千代姫の婚礼調度」のうち、「初音の調度」より

徳川美術館蔵 重要文化財

源氏香の図



香には特定の主題が存在します。その主題は詩歌・物語から取つたもののが最も多く、中でも他を圧するものが「源氏物語」なのです。

宇治香、源氏四町香、源氏三習香、空蝉香、鉛虫香、篝火香、舞楽香などがその例ですが、代表的な組香として最も著名なのが「源氏香」です。組香は、炷き出す香木と順序を香元があらかじめ決めておき、意図的に流れを組み立てるものと、炷き出す順序を香席での偶然に任せて、全体の流れの解釈を連衆一人ひとりの主觀に委ねるものとに大別されます。

組香は、炷き出す香木と順序を香元があらかじめ決めておき、意図的に流れを組み立てるものと、炷き出す順序を香席での偶然に任せて、全体の流れの解釈を連衆一人ひとりの主觀に委ねることに由来しています。香後者の中に、広義の「系図香」が含まれています。その名称は、解答が線のつながりによって記され、家系図に似ることに由来しています。香木三種によるものを三種香、四種を系図香と呼び、「源氏香」では、五種の香木を各五包ずつ用います。

合計二十五包の香木を打ち交ぜ、任意に五包を取り出し、これらを任意の順に炷き出します。全てが一の香かも知れませんし、二の香が三包、四の香が二包かも知れません。この組合せの可能性は全部で五十二通りあり、これに源氏物語全五十四帖のうち、最初の桐壺と最後の夢浮橋とを除く五十二帖の巻名を当てはめました。

組香の席に参加した連衆(客)は、順次炷き出される一番目から五番目までの香を聞き分け、何番目と何番目が同じ香木であつたかを図によつて示した上、当てはまる巻名を記して、解答とします。例えば、一番目と四番目が同香、三番目と五番目が同香であつた場合、炷き出された香木を表わす五本の線のうち、右から二本目と四本目の上部を結び、また、三本目と五本目も同様に結ぶと、廻の図が出来上がります。この図形を「源氏香の図」と呼ぶのですが、五十二のうち、この場合は「初音」となります。

言ひ表わすならば、組香とは二種類以上の香木を順次炷き繋いで、それ等の香味の微妙な相異や変化を、全体の流れの中に感得する聞香方式であり、その種類は数百にものぼります。

室町時代、東山文化の流れの中で他の多くの芸道と共に確立されていった香道の、初期の段階に一部の例外が見られるものの、ほとんどの組

「源氏香」の真髓は、香りの異同を聞き当てる楽しさにあるのではなく、

薫物の主要な原料

沈香

「常温ではあまり香らないが、加熱することにより、幽玄な芳香を発する。鎮静作用の他、循環器・呼吸器に有効な成分を含む。」

麝香

「ジャコウ鹿の雄の香囊より採取される分泌物。一頭から約三〇グラム採れるが、現在はワシントン条約の対象として保護されている。空気に触ると顆粒状に固まる。極めて強い香りを発し、薄めることにより、芳香と感じられる。稀少な香料として珍重されて来たが、媚薬としての側面も見逃すことが出来ない。」

丁字^{トノ}・モルツカ諸島原産のフトモモ科の常緑高木の花蕾。実を鳴舌香と称する。香料の他、防腐剤・健胃剤として有効。

甘松^{かんじゆ}・中国・インド等に産するオミナエシ科草本の根・茎。香料としては根が適し、茎は鎮痛・健胃剤として有効。

薰陸^{くんりく}・インド・イラン原産のクンロクコ科より分泌する樹脂が、土中に埋もれて生じる半化石状樹脂。

鬱金^{��金}・ショウガ科ウコン属の多年生草本の根茎。健胃剤。

藿香^{かつこう}・南アジア原産のシソ科の多年生草本の葉。乾燥させることにより、強い芳香を発する。防虫効果の他、解熱・鎮痛の薬効あり。

貝香^{かいこう}・甲香又は貝甲香とも言う。巻貝の蓋で、サンジバル産が良質。

芳香とは言い難いが、保香剤として重要であり、薫物には必ず用いられている。

焼き出された香木の香味を十分に深く鑑賞し、究める過程において、例えは各々の香りに似つかわしい登場人物を当てはめるなどしながら、自らの想像力によって物語を開拓してゆくところに在ると言えます。そして、その奥ゆきの深い構想の故に、「源氏香」は「源氏物語」に主題を求めるにふさわしく、香道史上極めて重要な存在になり得たものと考えられるのです。

(やまだまさひろ・麻布香雅堂主人)



「宇治香箱」、組香の解答用(十人分)に使われた「宇治香札」

「千代姫の婚礼調度」のうち、「宇治十帖」に因んだ調度

徳川美術館蔵 重要文化財